

芳賀日向写真展 「東日本大震災・被災地の夏祭り」

私は祭り写真家です。2011年6月～8月に取材しました東北被災地の夏祭り6都市7カ所の写真展を2012年6月に東京、7月に仙台で開催いたしました。写真展を通じ、多くの人々に被災地の夏祭りに関心をもっていただき、一人でも多くの方々に被災地の夏祭りに訪れ、現地で応援をしていただきたいとの願いです。

■展示写真点数 全倍35点

■取材地 福島県相馬市・南相馬市「相馬野馬追」、青森県八戸市「八戸三社大祭」
宮城県仙台市「六魂祭」、「仙台七夕まつり」、塩竈市「塩竈みなと祭り」、
宮城県石巻市「石巻川開き祭り」、 岩手県陸前高田市「動く七夕」

平成23年3月11日の東日本大震災後、関東各地では相次いで祭りの自粛・中止が発表されました。一方被災地では、夏祭り開催の声明が次々となされました。震災の被害甚大な地域で祭りを開催することは大変な事です。被災地各地はどのような思いをこめて祭りを開催するのでしょうか。そこに祭りの原点があると思い平成23年6月～8月にかけて被災地の夏祭りを取材しました。取材を通じて感じたことは、1) 祭りは郷土と人を結ぶ絆であること。郷土から遠くに離れた人にも、郷土のことを思い出してほしいという気持ちが込められています。2) 被災地で少しでも元気が出たところは、元気がでましたよ！とのメッセージを祭りを通じて発信しました。3) 全国の人に被災地に関心を永くもってもらいたいのです。



芳賀日向写真展
東日本大震災
被災地の夏祭り

青森県
岩手県
宮城県
福島県

撮影
2011年6月～8月

銀座：'12年6月21日(木)～6月27日(水)
10:30～18:30 日曜休館(最終日15時迄)

仙台：'12年7月12日(木)～25日(水)
09:00～17:30 土曜・日曜休館

CANON
GALLERY

芳賀日向（はがひなた）／日本・世界の祭りの写真家。1956年生まれ。朝日新聞社「週刊日本の祭り」全30巻に「祭りを撮る」を連載。日本経済新聞社水曜夕刊「地球ハレの日」連載。2009-2012辰巳出版「日本の祭り400」監修。2012年PHP研究所「日本の祭り大図鑑」監修。写真展・2007年-2008年全国5都市キャノンギャラリー「世界のカーニバル」。鹿児島市おはら祭審査委員長。キタムラ日本の祭り写真コンテスト審査員。日本写真家協会、全日本郷土芸能協会会員。

被災地の祭り ～人と郷土をむすぶもの～

祭り写真家
芳賀 日向

昨年3月11日の東日本大震災の後、関東各地では相次いで祭りの自粛や中止が発表された。自粛・中止となった主な祭りは、5月：日光東照宮「春季例大祭」「百物揃千人行列」(栃木)、「神田祭」「三社祭」(東京)、7月：「隅田川花火大会」(東京。後に8月末に延期開催)、8月：「東京湾大華火祭」(東京)など。規模を縮小し神事だけを執り行った祭りは、日本各地で多数に及んだ。

その一方、4月12日には被災地の青森県八戸市から「八戸三社大祭」(7月31～8月5日)の開催が発表された。その後、宮城県塩竈市からは「塩竈みなと祭」(7月18日)の開催が発表され、宮城県仙台市では7月17日に東北の六大祭りが一堂に集まる「六魂祭」の急遽開催、そして例年通り8月6～8日まで仙台七夕まつりを「鎮魂と復興への願い」を込めて開催するなど、続々と被災地から夏祭り開催の声明が発表された。自粛中止になった日光東照宮付近の旅館、土産物屋からは、震災後に観光客が



鎮魂と復興を願いキャンドルを灯す。(石巻川開き祭り)

激減したうえに、例年3万人もの人出で賑わった祭りが中止になり、悲鳴があがっていることがニュースで放映されていた。

関東では祭りの自粛発表が行われ、東北被災地各地では夏祭りの開催声明が続く。ここに祭りの原点があるのではないかと思います、6月より8月初旬まで被災地各地の祭りの取材を行った。

石巻川開き祭り 宮城県石巻市 7月31～8月1日

人口約16万人の石巻市は震度6強、高さ10mを超える津波が押し寄せ、3,280人が死亡、行方不明者557人(平成24年2月10日現在)となった。津波を増幅させるリアス式の雄勝湾の入り口にあたる水浜集落は壊滅し、北上川の土手を乗り越え、水田と点在する民家を全て押し流した。

石巻市では4月2日に今年で88回めになる石巻川開き祭りを例年通り7月31～8月1日に開催する決定をした。東日本大震災で亡くなった方を供養し、新しい石巻をつくる勇氣

と希望を市民に与えたい(石巻商工会議所)との主旨である。鎮魂祭では1万個の灯ろうが旧北上川を流れ、死者の名前が呼ばれて市民によるお焼香が行われたが、890名の行方不明者(祭り当日)の名前は、家族が死者として認めたくないという思いから呼ばれることはなかった。

石巻市は漫画の町としても有名で、石ノ森章太郎の漫画館があることで知られていたが、津波で壊滅した。祭りの夜には、市内の小学生による漫画絵灯ろうが、石巻駅より会場まで並んだ。子ども

たちが灯ろうを作り、石巻のまちを明るく元気にしていこう、との主旨だ。「日本がんばれ」「負けないぞ石巻」との願いを込めて漫画が描かれた灯ろうは、5千個にもなった。



市内の小学生たちにより作られた絵灯ろう。

相馬野馬追

福島県南相馬市、相馬市
 7月23～25日

相馬野馬追は、旧相馬・中村藩領（相馬市・南相馬市）に一千余年伝承されている野馬を捕らえる軍事訓練と捕らえた馬を神前に奉納する神事だ。500余騎の騎馬武者による時代行列、甲冑競馬、神旗争奪戦が行われる。甲冑競馬では、先祖より伝わる旗指物（幟^{のぼり}の旗）で飾った鎧兜



野馬懸

姿の武者が、雲雀ヶ原祭場の1200mの距離を疾走する。神旗争奪戦では、数百騎の騎馬武者が花火で打ち上げられた2本の神旗を争奪する。騎馬武者の魂が祖父から父、父から子と代々受け継がれ、この祭りに出場するために愛馬と暮らしたり、1年間金を貯め北海道より競走馬を借りたり、祭りそのものが人生の生き甲斐となっている。町の人々にとっても、相馬野馬追が来ると夏が来たと思うほど生活と祭りが密着している。

南相馬市は事故のあった福島第一原発から30kmの範囲内にあり、祭りの開催は大変に危ぶまれた。

6月17日、開催についての記者会見が行われた。「本年(2011年)においては、亡くなられた方の鎮魂を願い、さらに相双地方の復興のシンボルとして、“東日本大震災復興 相馬三社野馬追”と称し実施することとなりました。」と発表された。雲雀ヶ原祭場が緊急避難所となっているために、甲冑競馬、神旗争奪戦は行わ

れないが、総大将出陣をはじめそのほかの行事は3日間にわたり全て行うという内容だった。執行委員長である南相馬市長の「千余年の歴史を絶やさないために。」という言葉が印象的だった。3日めは、原発20キロ立ち入り禁止警戒地区よりわずか200m離れた多珂神社で、最も重要な神事である野馬が神馬となり奉納される「野馬懸^{のまがけ}」を行うということだった。

7月23日より3日間にわたり取材を行った。目の前で家族や愛馬を失った悲しみのなかにおられる方も多い。鎧の肩には喪章があり、全ての行事は法螺貝^{ほらがい}が10回鳴り響くなかでの黙祷からはじまった。いつもは500騎の騎馬が勢揃いするのが、80騎だった。騎馬武者魂でこの国難を乗り切ろうという意気を感じられた。肩に喪章をつけた子どもたちの姿が痛々しい。観戦した親子、老人たちからは「これで夏が来た。」とやっと笑顔が現れた。

八戸三社大祭

青森県八戸市 7月31～8月5日

一番早く夏祭り開催の声明を出したのが、八戸三社大祭だった。八戸市には全国第3位の水揚げ量を誇る八戸港がある。6.4mの津波は、八戸港、周辺の工場をずたずたにした。しかし、震災後の5月12日には初水揚げが行われ、7月3日からは恒例の港の朝市が復興した。

八戸三社大祭は、約300年の歴史があり、市内の27町がそれぞれ毎年町民の手作りにより山車を制作する。2月の雪の中では800年伝承されている秋の豊作を予祝する民俗芸能「え

んぶり」が行われ、八戸三社大祭と同じ町がえんぶりの組となり芸能を奉納するところも多く、町民の間の連帯感は大変に強い。そして、町どうしがさらに助け合う東北の気質をもっている。八戸市では、国の助成を待た

ずに市と市民が一体となり復興に取り組んだ結果、同被災規模の中では最も早く復興をなしとげた。祭りでは八戸市長により「少しでも復興が進み元気が出た東北被災地から、祭りを開催することによって、その元気をメッセージとして全国に発信し



復興を願い山車の太鼓を元気よく叩く。

よう！」と開会宣言が行われた。山車には小中高校生が乗り、威勢よく太鼓をたたく。山車を曳く子どもたちも大きなかけ声を出す。元気いっぱいに地元の祭りに参加することによって、その元気が他の被災地にも届くことを願っているのだ。

仙台七夕まつり 宮城県仙台市 8月6～8日

東日本大震災は千年に1度の大地震といわれている。平安時代869（貞観11）年は、まさに国難と呼べる時代であった。今回の大震災とはほぼ同じ場所にマグニチュード8以上と推測される大地震と大津波が起こり、天然痘が流行した。その5年前には富士山、阿蘇山（熊本県）が噴火し、さらに2年後には鳥海山（山形県）が噴火した。京都の人々は八坂神社の祭神「牛頭大王」の怒りと畏れ、日本の国の数である66の矛を建てその怒りを静めた。それが現在の祇園祭のはじまりとなった。京都の人々は疫病や震災の不安の気持ちを祭りに込め、祇園祭は千年以上の時をつないで美しい優雅な形をつくりあげ、全国各地に伝わった。各地で祇園祭という名前が使われているのはこのためだ。6月21日の読売新聞に、「祇園祭みちのくへ」という見出しが載った。現在のこの国難を鎮めるために、京都の祇園祭が仙台七夕まつりに参加し悪霊を祓い清めるといふ。

仙台市若林区荒浜地区では、津波の高さを最大2～3mと予測し、約5mの防潮堤と数百mの松林で備え

ていたが、今回の津波の高さはその3倍近くだった。逃げ遅れて犠牲となった人々が被災地では最も多く200名を超した。現地を訪れてみると広大なエリアにわたって建物の土台しか残っていない。

仙台七夕まつりは、今年は「復興と鎮魂」をテーマに行われた。例年では、繁華街には色鮮やかな七夕飾りが夏の風にたなびいているのだが、今年は、深い哀悼を込めた紫の七夕で飾られている。銀の折り紙で作られた折り鶴の大きな七夕飾りが人を集めていた。市内の小中学生により折られた復興を願う8万羽の折り鶴飾りだ。全国の小中学生から励ましの色紙が届き、会場に飾られている。一人一人の励ましが大きな力となって地元の人たちに届いているのがわかる。世界各地から届いた折り鶴も8万羽を超した。

京都から祇園祭の人々がやってきた。明日はよい日になりますようにという日和神楽を演奏した。山鉾連合会の理事長が挨拶をした。「この長刀には魔力があります。災いを退散させる力があります。決して京都から外に出ることのなかった長刀を持って参りました。」と。



鎮魂と復興を願い市内の小中学生により折られた8万羽の折り鶴。



うごく七夕まつり 岩手県陸前高田市 8月6～7日

津波被害の最も大きい地域の一つが陸前高田市だ。町は流失してしまい面影は残っていない。この陸前高田では、800年前からとも300年前からともいわれている七夕行事が行われている。この七夕は盆のプレ行事で、お盆に帰ってくるご先祖様の霊に、帰る目印を七夕の山車を曳き、太鼓をたたき、伝えるのだ。インターネットのホームページに、陸前高田うごく七夕まつり運営委員会より「夏の開催に向けて必死に努力をしています。」という声明が載ったのは5月だった。しかし、13台あった七夕の山車が2台を除き全て流失してしまった。大石地区では住民600人のうち150名が死亡、250名が避難所へと移動し、とても祭りができる状態ではない。山車の飾り付けをする公民館も泥で埋まっている。大石地区の山車が埋もれた泥の

被災地の祭り ～人と郷土をむすぶもの～



津波で流失した駅前繁華街を行く「うごく七夕まつり」の山車。(本誌表紙の写真は山車のアップ。)

中から見つかったことがHPに掲載されると、動いたのは全国のボランティアたちだった。ボランティアたちの支援により公民館は修復され、山車の飾りは避難所の親子たちも一緒に飾り付けられた。しかし、ここで問題があった。運営委員長は郵便局に勤めている若い方で、開催に向けて町の長老たちを説得するのだ

が、「こんな状態では祭りをやるべきではない、自分たちの手で祭りができないのなら今年はやる必要がない。」という意見と、「何百年も続いた伝統を絶やすべきではない。亡くなった方たちへの弔いのためにも祭りをやるべきだ。」との意見に、地区は二分された。最後まで歩み寄りはなく、祭りは運営委員会側と各地ボ

ランティアたちによって開催された。津波で流失してしまったかつての駅前繁華街を、町の子どもたち、ボランティアたちによって山車が曳かれていく。山車を曳く小学生の子どもたちは、久しぶりの笑顔にあふれている。地区の住人、子どもたち、ボランティアの人々。善意のつながりが一体となって祭りは実現された。

最後に

被災地の祭りの状況はさまざまだった。復興の目処がつき、さらに発展を願うところ。一步一步前に進んでいるところ。まだ一歩が踏み出せないところ。復興の光さえ見えず人々の頭の中には絶望の文字が浮かんでいるところ。

そして、少しでも前に踏み出せたところは、復興のシンボルとして祭りをを行う。元気が出ましたよ、とのサインだ。祭りは人と郷土を結ぶ絆だ。人は郷土を忘れないために祭りをを行う。日本各地と被災地

を結ぶのは、子どもたちの小さな力が集まった大きな支援の声と、被災地の祭りでの元気な子どもたちの姿だ。その子どもたちの絆が、復興への希望という大切な役割を果たしている。子どもたちの未来のためにも、一日でも早い復興を願っている。

芳賀日向写真展「被災地の夏祭り」

(日曜休館 入場無料)

平成24年6月21～27日 東京・銀座 キヤノンギャラリー

平成24年7月12～25日 宮城・仙台 キヤノンギャラリー

今夏に行われました二つの被災地の夏祭りです。

福島県での「相馬野馬追」では昨年は祭場が避難場所となったために、ハイライトである甲冑競馬と神旗争奪戦がおこなわれずに騎馬は80騎だけのお行列と神社で神事がおこなわれました。

今年（7月28日～30日）は408もの騎馬が出場し、甲冑競馬、神旗争奪戦（打ち上げ花火で地上160メートルに神旗を20回打ち上げ騎馬武者が獲り合う）も例年通り盛大に行われました。町の人々も祭りの期間中は言葉使いが武士口上となりました。全国各地へ福島から避難した人たちも祭りのために郷土に帰ってきて4万人もの観衆となりました。郷土がかつての相馬に戻った日でした。



8月6～7日は岩手県陸前高田市で今年も「うごく七夕まつり」が行われました。昨年は3台の山車だけでしたが今年は6台に増えました。祭りの起源は「盆の入り」に先祖たちに自分たちの郷土の存在を告げることに始まりましたが、現在ではうごく七夕の山車の上で太鼓を叩く姿は若者の晴れ舞台でもあります。陸前高田市は多くの人口が津波で失われてしまったために、地元の人たちだけでは祭りではできません。そこで全国各地からボランティアの学生たちが集まり、ボランティアと町の若者とのコラボレーションとして今年の祭りが開催されました。流失した町を中心に広場ができ、そこにはバンドのステージや屋台が並び、オープニングで風船が一斉に打ち上げられるなか、地元の若者たちの山車の上から太鼓による競演、そしてボランティアの若者たちがそれを応援して盛大な祭りとなりました。



相馬と陸前高田では、昔からそれぞれ伝統的な祭りをおこなっていましたが、震災後に二つの方向に分かれました。相馬ではあくまでも伝統を守り土地の人たちが昔ながらに祭りを行いました。

陸前高田では学生を中心とした全国からのボランティアの人たちが地元の若者たちと結びつき、新たな祭典として歩み始めました。私は、今後も見つめて行きたいと思います。